

LIFE

郷土と文学

文学旅行に出かけよう

< 配当時間数 35時間 >

福山出身の作家井伏鱒二の作品を読み、井伏の常設展示のあるふくやま文学館と、井伏のふるさとである加茂栗根を訪れる。ゆったりと作品を読み、ふわりと文学の旅に出てみようというわけである。

キーワード：郷土 文学旅行 井伏鱒二



1. 単元の目標

井伏鱒二は福山出身の作家である。井伏には、「山椒魚」「屋根の上のサワン」や「黒い雨」など、生徒に読ませたい作品がある。加えて、福山市には、1999年4月に開館した「ふくやま文学館」がある。井伏の展示を中心に、郷土出身の文学者たちの紹介がしてある。有効に利用したい文化施設である。また、福山市加茂町には井伏の生家があり、井伏文学の原風景を見ることがもできる。出かけてみたいものである。

教室で、ゆったりと文学を読み、考える。そして、ふわりと教室の外に出る。これがコンセプトである。それには、生徒の主体的な活動が基本となる。

ふくやま文学館



2. 単元の構成と特色

とにかく読む

オリエンテーションの次には、井伏の短編を読む。新潮文庫で「山椒魚」、角川文庫で「屋根の上のサワン」を読む。読んで考えたことを話し合う。感想発表会や討論会をおこなう。

ふくやま文学館にでかける

休日の土曜日を利用して、「ふくやま文学館」に出かける。3時間くらいたっぷり時間をとって展示を見る。帰ってから、感想を書く。

ふくやま文学館



第4章 LIFEの事例

とにかく読む

新潮文庫で「黒い雨」を読む。これには10時間くらい必要である。毎時間基本的には黙読を続ける。読みの進行状況を確認しながら、ときおり場面状況や作品の特徴などについて解説するが、とにかく、読む。

はやく読み終えた者は、「黒い雨」の原資料である『重松日記』（筑摩書房 2001年5月刊）を読んで、本文比較を試みる。

井伏のふるさと加茂栗根へ

福山駅から井笠バスに乗って40分、福山市加茂町栗根にある井伏鱒二の生家を訪ねる。周辺のゆかりの場所を歩く。

井伏文学について考える

教室で、映画「黒い雨」（1989年 今村昌平監督）をビデオ鑑賞する。そして最後に大江健三郎の講演「井伏さんの祈り、私の祈り」（新潮カセットブック）を聴く。



井伏生家下辻堂のお地藏さん

3. 主題に迫るための手だて

上記のような単元構成に基づいて展開していくのだが、ポイントは、二度の「文学旅行」に向けて、どのように興味を喚起するかということであった。

（1）ふくやま文学館に行くにあたって

「山椒魚」を読んで感想を書かせると、生徒たちの心の中が見えてくる。いろいろなことに縛られ、悩み、心と体のバランスに苦しんでいる自分たちのすがたを、「山椒魚」に重ねて読む生徒が多い。「山椒魚」は生徒たちにとって、とても身近な作品になる。

また、「屋根の上のサワン」を読んで、「山椒魚」と比較していけば、いろいろな見方が出てくる。

文学館に行く前に、いづらか井伏のことを調べてみることも必要である。そこで、井伏の文学年表を作らせることも考えられる。

（2）井伏のふるさとを訪れるにあたって

「黒い雨」もそうだが、井伏作品のポイントには、新鮮な目でとらえた自然の描写が配置してある。その点は、生徒に気づかせておきたい。

そして、それはどこにあるのかということなのだが、井伏のふるさと栗根への旅は、それを生徒一人一人が自分の目で確かめるものとなる。



生徒作製の井伏文学年表

第4章 LIFEの事例

4. 単元における評価の観点・方法

(1) 井伏という作家とその作品について、興味・関心をもつ

郷土出身の作家でありながら、井伏鱒二という作家について知っていなかったり、い万人やその作品を読んだことのない生徒がいる。まずは、そういうところから始まるわけであるが、井伏についての話を聞いたり、作品を読み進めていくうちに、関心は深まっていく。また、教室で作品を読むだけではなく、外に出かけてい中で、体が感じるようになるに違いない。

(2) 文学旅行の感想文で評価する

二度の旅行から帰って、生徒は感想を書く。次のようなものは、じゅうぶんに目的を達成しているといえよう。

ふくやま文学館に行くことに、私は初めあまり興味を感じませんでした。しかし、実際に行ってみて、一つ、少し興味を持ったものがあります。それは、生の原稿でした。私が今まで読んできたものは活字になってしまった文章だったし、これから読んでいく文章も大部分が活字でしょう。そんな世界の中で、生の、手で書かれた原稿に、私はとてもひかれられました。何か、おもしろかったのです。だから、私は、文学館から出たとき、ちょっとした充実感のようなものを感じました。

ふくやま文学館見学



井伏鱒二の故郷を訪ねた文学旅行。坂を上って到着した井伏さんの生家から周りを囲む山などの景色を眺めて、昔ここに井伏さんもいたんだと思うと、不思議な気がしました。(中略)それにしても、この加茂という土地の自然のすばらしさには驚きました。特に、窪田邸で見たもみじの木々の色はまるで絵のように美しかったし、井伏さんが遊んだという小川は、今も自然がそのまま残っているようで、井伏さんの作品の多くが、この場所を題材にしているというのもうなずける気がしました。とにかく、ここでは時間がすごくゆっくり流れている感じがしました。今回この土地を訪れたことで、これから井伏さんの作品を読む上で、イメージがわきやすくなるかもしれません。



四川の井伏文学記念碑

第4章 LIFEの事例

5. 教科等との関係

国語科ではこれまで、教室の外に出る国語教室として、1974年以来、「万葉旅行」や「源氏物語の旅」「平家物語の旅」などを実施し、ほとんど毎年、京都や奈良明日香の地を訪れてきた。近年では、「郷土と文学」をテーマに掲げ、鞆の浦を詠んだ大伴旅人の歌を鑑賞し、実際に鞆の浦に出かけてきた。



鞆の浦三景

教室の外に出る国語教室の流れのなか、「郷土と文学」というもうひとつのテーマを具体化させたのが今回の「郷土と文学——文学旅行に出かけよう——」という单元である。



ふくやま文学館



井伏生家への坂道

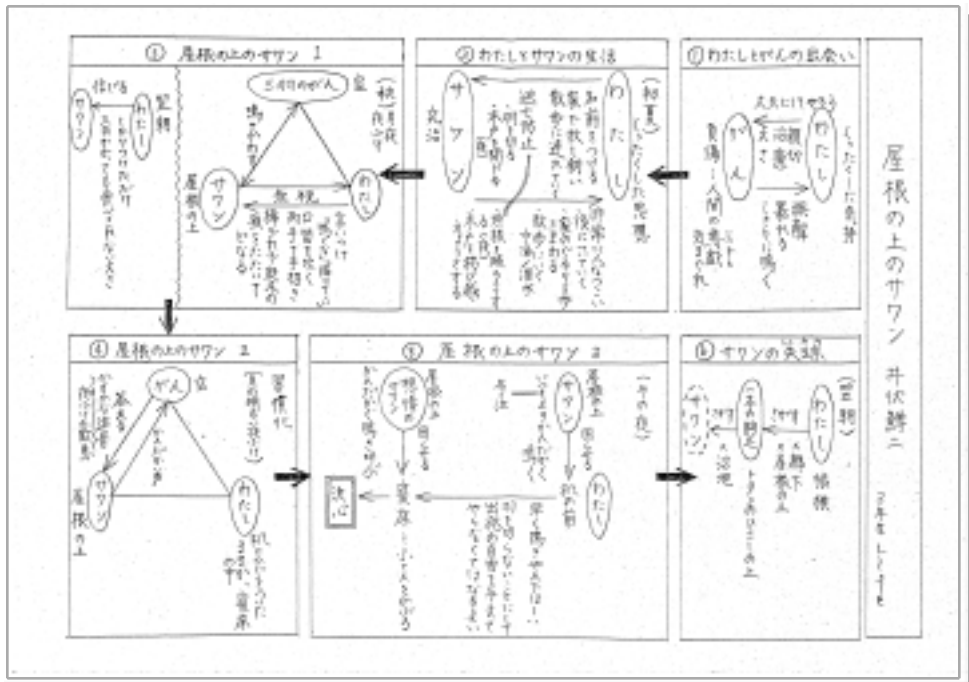


窪田邸のムクノキ

第 4 章 LIFE の事例

7. 指導のポイント

映画の「黒い雨」を生徒と一緒に見ながら考える。生徒の心の中で、何がどうごめいしているのか、わからない。しかし、ゆっくりと時間をかけて、しずかに小説を読み、話し合ったことは、何よりも貴重である。そのうえで、「ふくやま文学館」の展示に見た井伏の世界が、井伏のふるさと加茂栗根のゆたかな自然や人情が、生徒の中で生き続けるにちがない。ともあれ、成果を性急に求めない方がよい。



(「屋根の上のサワン」を読むためのシート)



井伏生家下辻堂のお地蔵さん



井伏生家からの山々



四川の清流

「屋根の上のサワン」と「山椒魚」について。

屋根の上のサワン

- 共通点**
- ① **サワン**：「わたしたちのまわりの世界が不自由だ。」
 - ② **サワン**：「お母さんの言葉がひどく、孤独だ。」
「そばにいていてくみろ存在がほしい。」
 - ③ **作者**：「自分と同じ立場の登場人物を主人公としている。」
- 相違点**
- ① **サワン**：「最後、結局逃げてしまう。」
「自分の思いを伝えられない。」
 - ② **サワン**：「素直に自分の気持ちを書き込んでいる。」
 - ③ **作者**：「最後は暗く終わっている。」

山椒魚

- 共通点**
- ① **サワン**：「山椒魚に無理に話さなければ不自由だ。」
 - ② **山椒魚**：「夢から出てきた、孤独だ。」
「理解者がほしい。」
 - ③ **作者**：「山椒魚と自分を同じ様な境遇にしている。」
- 相違点**
- ① **山椒魚**：「最初から山椒魚の視点で書かれている。」
「山椒魚と話すとかができる。」
 - ② **山椒魚**：「お母さんに話したり、カエルに対して話したりが書かれている。」
 - ③ **作者**：「最後は希望が持てるかのように終わっている。」
「山椒魚に思いが伝わる。」



「屋根の上のサワン」



「山椒魚」

思考

- ・この2つの書にはさまざまな共通点がある。しかし、最後の終わり方は大きくちがっている。これは、作者の思いが変わったのか、それとも作者のまわりの環境が変わってしまったかなどの理由があると思う。
- ・山椒魚とサワンには決定的な違いがある。それは、「わたし」とサワン、が話せるかできないか所である。「話せるかできないか」とは「心を通わせることができるか」という事と同じなのだ。「山椒魚」と「屋根の上のサワン」が発表された井伏の初期の作品の中でどのような変化があったのだろうか。

（「屋根の上のサワン」と「山椒魚」の比較レポート）